入選

— 大学・一般の部 —

「自分が自分であること」

深津祐介さん

推　し　本：『変身』
　　著　　：東野圭吾
推したい相手：娘

「自分が自分であること」　深津祐介

「自分が自分でなくなる」これは小説にありふれたテーマである。例えば、ケガをして今までの生活ができなくなる、大きな罪を犯して十字架を背負う、悲劇に遭い心に大きな傷を負う、などがそれに当たるだろう。本作品の主人公も「自分が自分でなくなる」のだが、その理由が特異的で「脳移植」である。主人公・成瀬純一は、ある事件で頭部に銃撃を受けてしまい、脳を損傷する。犯人はすぐに自殺をするのだが、その犯人の脳が純一の脳と十万分の一の確率の奇跡的な適合性を持っていることがわかり、世界初の成人脳移植を行える状況となった。医師団は舞い上がり、殺人犯の脳を被害者に移植することの倫理性を考えるよりも世界初の功績への虚栄心が勝ち、移植に踏み切る。果たして脳移植は成功し、純一は一命を取り留める。当初、医師側は「脳は特別ではない」と考え、心や人格が変わるということに否定的だった。しかし、純一の性格・趣味・思考などは本人の意志とは無関係に徐々にドナーの影響を受けてしまい、“変身”していくというストーリーである。言わずもがな、東野圭吾氏の著作は多数あり、人気や評価が高い作品も多い。その中で、この『変身』はポピュラーではないかもしれない。しかし、私は、もう二十年以上この作品がベスト・オブ・東野作品である。私が東野氏の作品を読むようになったのは高校生の時だ。東野氏が技術者出身の作家であることは有名だが、それゆえ作中に技術者がよく登場し、科学や技術の要素が多い作品が、理系一本槍だった私にはとても面白く感じられ、好んで読んだ。私は高校時代から将来はものづくりがしたいという思いが強く、大学で機械工学を学び、メーカーへ就職して技術者となった。科学や技術を生業とするようになった今でも東野作品を愛読し、“科学や技術の要素”を更に面白く感じることができているが、そんな私が、この『変身』という、科学や技術よりは医療や心理といった要素が強いこの作品に惹かれ続けるのはなぜだろう？それは、冒頭で述べた「自分が自分でなくなる」過程に、強く共感するからだ。作中で、純一は、少しずつ変化していく自分に戸惑いながら徐々にそれを自認していく。例えば、言動が変わる、趣味である絵のタッチが変わる、飲食の嗜好が変わ

る、などがある。これらは自ら発する変化、ここでは能動的な変化と表現しよう。これに対して、受動的な変化も描かれる。魅力的に思っていた恋人をそう感じなくなる、面白いと思っていた映画が無味に感じる、など、自らの五感を通して触れた事柄に対して湧き起こる感情が変わるのだ。純一は、むしろこの受動的な変化によって、ドナーの影響を受けていると確信を強めていく。私はここに強く共感するし、実際にこの立場になったらそう感じると思う。能動的な変化は、他人から見て客観的にわかりやすい一方、自分で制御もできる。だが、受動的な変化は、自分の中で発生する感情であり、偽ったり抗ったりすることができないからだ。私は「自分が自分である」ことは、受動的な感情こそがそれを表すと考えている。もちろん、自分から発信する言動は個性を表現してはいるが、自らの意志で変えられるし、他人が真似することもできる。しかし、毎日の生活の中で、何かを見て、聞いて、触って、それによってどういう感情が湧き起こるか、それこそは自分だけの唯一のものであり、それが自分の人格を形作っているものだ。私はG線上のアリアを聞いて心の安らぎを感じたり、数学の数論に面白さを感じたり、宇宙望遠鏡の画像に美しさを感じたりする。これは変えようがなく、自我である。もしこれが如実に急速に変化していけば、まさに自分の人格が失われていき、別の人格へ変貌している感覚に陥るだろう。それが描かれていることが、私がこの作品に惹かれる理由だと思う。そして、純一が決定的な確信を得る場面がある。それは、ドナーの双子の妹・亮子に会う場面だ。その描写は、純一が“変身”していく様々な描写の中で白眉である。何度読んでも、自分が純一になって亮子と接しているような感覚を覚える場面であり、私が最も好きな場面でもある。そうして確信を得た純一が、最後にどういう行動を取るかは是非読んで頂きたい。さて、この傑作を誰に推したいか、それは私の娘である。まだ7歳だが、医師になりたいと言う。本作は、純一と医師の争いでもある。医師は純一をデータ取りのサンプルとしか捉えておらず、真実を隠し、寄り添う心は無い。純一は医師と対立し、“変身”に怯えながらも真実を探すのだ。娘が医師になった暁には、患者の苦悩を理解し、真実を共有し、寄り添う心を持った医師になってほしいと願い、本作品を推したい。また、娘が成長し、この本を読んだ後にお互いの感想について語り合うのも、私のささやかな夢である。こういう夢をもつことも「私が私であること」なのだと思う。